

天野本家と種徳館

天野本家の主家

都留市の西端に位置する境集落の北辺は、背後に桂川が流れる平坦地、この周辺に境弾正屋敷跡や天野家、米山家など旧家が集中している。



天野本家

天野保宏家は、この一角に「天野本家」として屋敷を構えている。天野家の歴代は、天明期（一七八一～八九）に組頭を勤めた伴蔵翁から、境村における有力な地主として、代々名主役に任じていた家柄であった。

なかでも、幕末の動乱期から明治にかけては、もっとも隆盛を極めたときであった。

文化十一年（一八一四）に生まれた伴蔵翁は、二十三才で境村の名主となり、嘉永六年（一八五三）、幕府が非常事態に備えた、品川沖御台場築造にあたり、その工事を請負ったのをはじめとして、江戸・相模・伊豆などに出て、回船問屋、木材・薪炭商、織物商等で幅広く事業を展開し、巨額の富を得たという。

江戸時代における天野家の屋敷地は一町歩余りの広さをもっていた。

桂川沿いに鹿留から伸びてきた道は、天野家から左折して倉見に向かっている。

西側のこの道に面して天野家の表門（長屋門）が構えていた。裏門（機造の棟木門）は北側で、種徳館脇（現存）となる。

天野家の屋敷は、中程の東流する水路を境として主家を中心とした部分と穀蔵の立並んだ部分に区分することができ。この主家を中心とした屋敷は、北面から東西にかけて堀で囲まれていた。堀は北側については道路拡幅のため埋め立てられたが、東側堀（幅約二、二〇メートル）

三、五〇メートル）は往時の景観をとどめている。

この中に主家、隠居屋・文庫蔵をはじめ、道具蔵（調度品などを収納）味噌倉、漬物倉、木炭小屋、かま倉等が東側の堀を背にして配され、主家を石垣（切石）で仕切られて流れる水路と堀を繋ぐ地点に水車小屋が建っていた。

天野家では猿橋で酒造業を営んでいたので、酒造用の精米所としていた水車小屋を桂川沿いにも設けていた。

主家の南面（現在は梅林、田、公民館等）に瓦葺き校倉造の穀蔵が軒を連ねて建ち、その穀蔵にはい・ろ・はの文字が表示されていたという。この蔵は戦後になって不要となったので解体されてしまった。

ところで主家の規模であるが、板葺きで総二階建て、七十坪余りで、一部に間口二間、奥行き十二間、二十四坪の三階建の大きな建物であった。

建物が、大きすぎるということで、明治三十年に建て替えたのが現在の主家である。

切妻、平入り二階建て、屋根はトタン葺きである。

郡内地域における民家の代表的な特徴としては、茅葺屋根（入母屋系と寄棟系甲造り）や板葺や杉・檜の皮葺屋根であり、間取りは、「整型四間取り」とその変形であった。

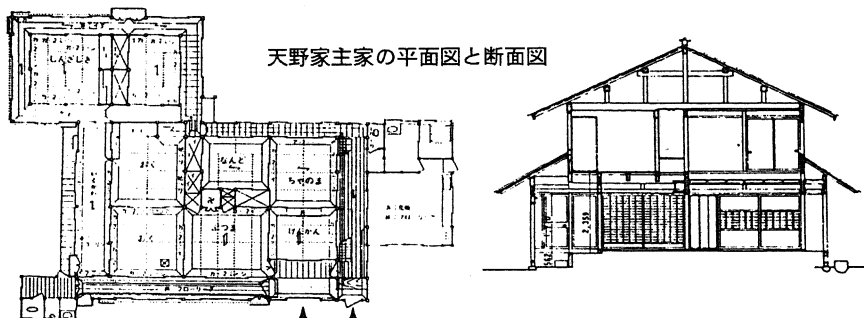
天野本家を見ると間口

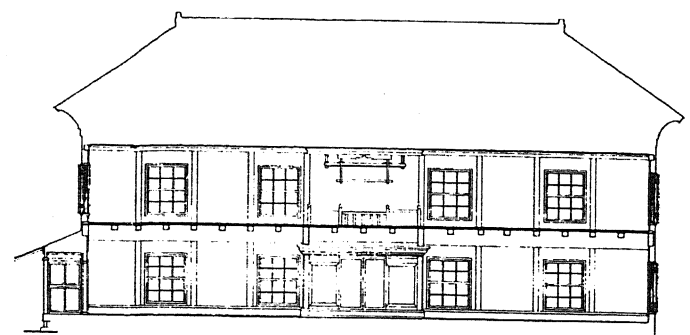
十間、奥行き五間、屋根はトタン葺きで、間取りは市域における農家の造りとは異なり、土間を設けない六間取り、仏間（十畳）を南面中央に取り、これに続いて奥の間（八畳）が二間設けられている。

なお、この奥の間の入側（廊下）ずたいに、大正時代になって新座敷二間（六畳・八畳）が附設された。

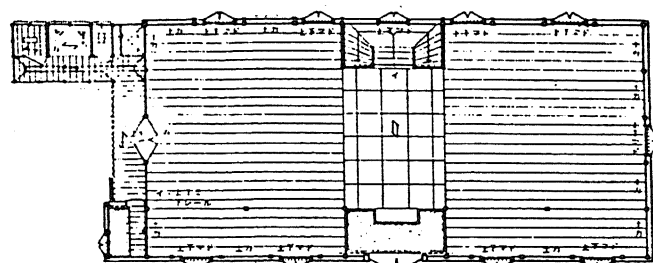
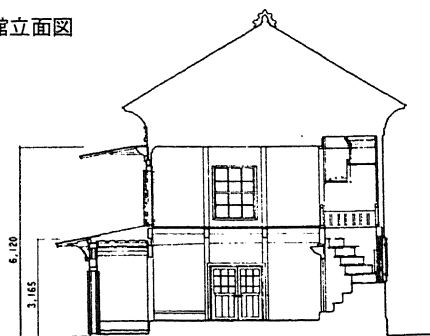
奥の間二部屋は、改造前のもので、雁の間と称している。雁の絵で日本の「邊壽民」と称された長尾無墨の絵で壁、小壁

天野家主家の平面図と断面図

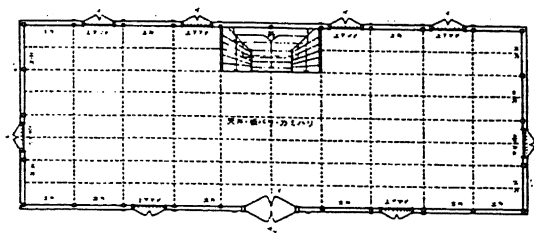




種徳館立面図



一階平面図



二階平面図（図面は何れも都留市史・資料編より）

また、太平洋戦争の末期、昭和十九年東京都における小
学校児童は戦災から逃れるため、地方への疎開が行われて
いる。南都留郡下への公立小学校は、各旅館に分宿、種徳

館へは私立暁星学園の児童六十名が疎開し、臨時教場とし
て使用している。
建物の規模は、間口十間、奥行五間で寄棟、平入り、総



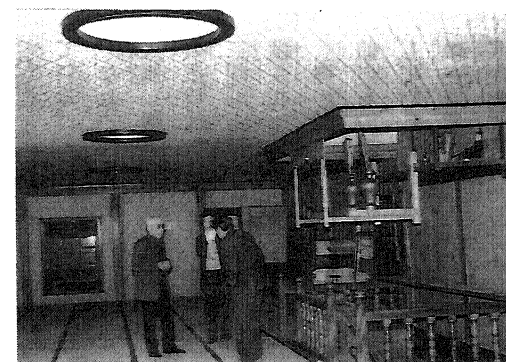
種徳館全景

敷地の北側道路
に接して、「種徳
館」という蔵造り
の建物がある。
この建物を天野
家では「しんぐら」
と呼んでいる。
「種徳」とは「広
く徳を世に施すこ
と」といい、青少
年の修身錬成の館
として、公共のた

あり、開蔵翁は多くの人々から国政への参画をと推されて
いたが固辞していた。その費用を村民公共のために、と銅
板葺きの蔵造り洋風建築を建て、種徳館と名付けた。
この建物は、明治三十九年（一九〇六）頃、桂川電力（株）
都留出張所の事務所として使用されている。発電水路工が
進められるに当たり、天野伴蔵翁は、明見取入口から鹿留
までの鹿留第一水路工事を請負っている。

種徳館

は装飾されている。
東妻側の勝手場は戦後になって建て替えられたが、この
前側には「帳場」が設けられ、小作米の収納や蔵米の出し
入れ等、番頭が帳付けをしていた部屋があったという。
主家の西側から裏庭にかけては、京都から招いた庭師の
造ったという名庭園が見える。



種徳館二階内部

めに役立てたい、
との主意を込めて
建てたものといわ
れている。
明治十八年（一
八八五）十一月、
開蔵翁は、桂村村
長に就任したが、
何故にをもってか、
翌年十二月職を辞
している。当時国
会開設の運動が高
まっていた折でも

二階建て、和洋折衷の擬洋風建築様式、総檜造りである。
建物内部は、一階は板敷で、中央部に階段室（上部に神棚）
を設け、二階は畳敷、一・二階共に八十畳の広さを有し、
二階天井はシャンデリアが三ヶ所に飾られている。外壁は
白漆喰塗りで仕上げ、下見板を打ちつけてある。
屋根と下見板は銅板であったが、戦争協力のため戦時中
火鉢等と共に供出させられてしまった。

中央玄関は、二枚の板戸で錠前がかけられ、その上部に
バルコニーが設けられていたが、現在は外されている。

建築年月については詳らかではないが、明治一五・六年
と専門家というが、本来の洋風建築とはかけ離れた和洋折
衷の擬洋風建築と称するこのような建造物は、時代的には
明治初期から二十年後半にかけての日本の近代化の時代を
示す固有の建物であり、その文化的、歴史的な価値の高
い建造物というべきであろう。因みに、明治時代の洋
風建造物として市内には小形山に所在する「旧尾県学校」
（県指定文化財）と古川渡の「旧明治医院」（国の登録文化
財）等が遺されている。

参考文献等

『天野保宏家文書』

『都留市の歴史散歩』

『都留市史資料編』（民家・民俗）

『日本民俗事典』

。本稿については、天野悦子、天野廣徳、天野仂夫の各
氏にご教示を賜りました。厚く感謝申し上げます。

（平成十三年三月二十四日）

（都留市田原三一四一九）

平成十二年度刊行郷土関係図書案内

検証 両谷村

大月周辺の方言小辞典

妙心上人その事績

町場の近代史

元近刀について『甲斐路』97号

都留市 内藤恭義著

大月市 小林秀敏編

津島市 古野賢吾著

東京都 松本四郎著

寄稿論文

都留市 内藤恭義